

横浜歌人会 会報 121*

横浜歌人会会報 第121号

目次

●Essay - Yokohama

- * 02 詠われた横浜・川崎——宮柊二歌集『群鶏』より … 桜井健司
- * 04 岡部桂一郎に寄せて … 高橋みずほ
- * 06 山崎方代と横浜 … 田村 元
- * 07 ぼくの住む町 … 吉野裕之
- * 08 自動車ぎらいが運転免許をとった … 嵯峨直樹
- * 09 丘の上の英連邦戦死者墓地 … 山本登志枝
- * 10 渡辺松男のみなとみらいの歌 … 鹿取未放
- * 12 師との思い出 横浜 … 塚田キヌエ
- * 13 まぼろしの笹下城 … 真鍋正男

●2020年度 総会+新春歌会+懇親会

- * 14 報告 … 正古誠子／河北笑子／塚田キヌエ
- * 15 詠草
- * 15 新代表委員挨拶 楽しく研鑽しあえる場を … 桜井健司
- * 16 編集後記

●付録=うたの地図 - Yokohama

＼付録／

うたの地図
Yokohama

詠われた横浜・川崎——宮柊二歌集『群鷄』より◎桜井健司

宮柊二の第一歌集『群鷄』、戦後三部作とも言われる『小紺珠』『晩夏』『日本挽歌』、いずれの歌集にも横浜の景を詠った、あるいは横浜を舞台とした作がいくつも認められる。もとより宮は、横浜と縁が深い。昭和九年、二十二歳の時、一家をあげて横浜市鶴見区佃野に転居する。昭和十九年二月、滝口英子と結婚、鶴見区鶴見に新居を構える。ほどなく昭和二十年三月、戦時下の家屋疎開で鶴見の家が取り壊されることに伴い、市内保土ヶ谷区川島町の富士製鋼所社宅に転居、昭和二十六年まで居住している。北原白秋の秘書として東京に仮寓、また出征していた一時期はあるものの、二十代、三十代の内、かなりの歳月にわたり、宮は横浜市内に住んでいた。それゆえ初期の歌集の内には、必然的に場所そのものを詠まずとも、その土地を背景とした作が多く見られる。住んでいる土地を詠んだ作から、何らかの特徴が見えてくるかもしれない。第一歌集『群鷄』の中において、横浜の地名の小題を付して詠った作、この他に勤務地であった川崎の工業地帯を詠った作も併せて取り上げてみたい。

膝抱きて狐のおもひにふけるとき厨辺に弟の叱らるるこゑ
厨辺に末の弟を叱りつつ母老いましてとりとめもなし
梅雨のあめ降りこむ池に浮びきていろくづはなべて喰囁ひにけり

「鶴見」という小題を付す三首である。佃野の家の家族の様子、近隣を詠んだ作であろう。一家が転居してからの生活の様子が伺える。深刻でありつつ、一方でどこか可笑しさ、人間味を感じさせる要素も伴っているように思う。三首目の池と魚を詠んだ作も、一、二首目の家族詠と合わせて読むと、作者と家族のイメージが自ずとスライドされてくるようだ。宮は、師である白秋に見られる浪漫性とは異なる、リアリズムの道を行んでいるのだろうか。

「鶴見」三首の更に後、歌集の終盤近くに「横浜」「川崎」と小題を付す連作がある。「横浜」全十二首より六首を引く。

街川に黒き家群は附きて沿ひいくつの路次か潜まりをらむ
おもおもと港に泊てし船影を左に見つつ夜の園の径
塵芥片寄り泛ぎし潮おもて暫くは瞰て今日は帰らむ
露けかる花鬘ぎつつ灯を明くこの街角に店なせる人
くさぐさの車馬足音の寄り来り岐れ過ぎゆくこの街角に
寂しくて舗装路歩む横浜の青き夜空に旗鳴る音す

いずれも透徹した視線で街や港の景を捉えている。一首目、川沿いにひしめくように建っている民家の様

子を捉えており、二首目は夜の港湾の景を静的に描写している。三首目は水際の景だが、実景でありながら作者が自身の内面をのぞき込んでいるような感覚がある。三首目以降は、横浜の商業地域である馬車道（初出では「馬車道三首」の小題が付されていたという）の街路の様子が描かれる。横浜という街の景色を借りながら、宮は何を表現しようとしたのか。同歌集中の白眉である連作「群鷄」を基礎にしつつ、連作「横浜」「川崎」についても言及した次の一文を転載する。

「群鷄」一連は、これまでの叙情味濃い浪漫主義的な方法へのアンチ・テーゼとして、自覺的にリアリズムの方法をこころみたまものであることは疑いない。このあと、作者は「川崎」「横浜」などでさらに徹底したリアリズムへと進み、續く『山西省』でそれはみごとに開花する。この意味で、「群鷄」二十首は、新しい一步をふみ出した記念碑的作品群なのである。

（高野公彦『柊二秀歌——「群鷄」』より）

「浪漫主義的な方法へのアンチ・テーゼ」という指摘は極めて重要であり、示唆に富んでいる。浪漫主義的な白秋の方法から出発し、師を超えるには何が必要か。居住する横浜、勤務先のある川崎といった、都市や港湾の雑多な風景を詠むことが、「徹底したリアリズム」へと向かうターニングポイントになったであろうことは、ここでもあらためて記しておきたいと思う。

その一方で、馬車道の景を詠み込んだ四、五、六首目の歌にも注目しておきたい。

「くさぐさの車馬足音」は、いかにも港らしい

種々雑多なものの入りまじる情景を端的にとらえた表現である。車輪の音、馬蹄の音が響きあう、いきいきとした、しかしどこことなくうら悲しい情緒をただよわせる港町の石だたみの上に佇って、作者はそこに象徴化された「人生」を感じとっていたのではないだろうか。

（杜澤光一郎『終二秀歌——「群鷄」』より）

五首目について言及した評だが、異国情緒の漂う港町横浜らしいショットであることが指摘されている。リアリズムが基軸となっていることは勿論だが、付言すれば、ここには宮らしいリアリズムと同時に、白秋の、特に初期作品における浪漫主義的な作風の影響も確認できるように思う。四首目は外国人を顧客とした花舗だろうか。いかにもエキゾチックだ。

腰ひくき浜のガイドが襟にさす温室咲きの花の色
の赤さよ
（北原白秋『桐の花』）

同じく横浜や花を素材とした、こうした作の影響もあるかもしれない。六首目の「横浜の青き夜空」という捉え方も、上句の感傷性と相まって仄かに浪漫主義的な雰囲気醸し出している。馬車道の景に象徴される横浜のハイカラな景色に素材を求め、リアリズムの中に浪漫性を伴奏させる。馬車道の景を詠ったこの三首からは、「新しい一步」を踏み出しながらも、一方で白秋の浪漫主義的な方法が宮の中で継承され、翻案されていたことが伺えるように思うが、どうだろうか。次に、「徹底したリアリズム」の意味について考えてみたい。まず、他の作家の歌を挙げる。

枯葦の中に直ちに入り来り汽船は今し速力おとす

嵐の如く機械うなれる工場地帯入り来て人間の影だにも見す

吾が見るは鶴見埋立地の一隅ながらほしいままなり機械力専制は

無産派の理論より感情表白より眼前の機械力専制は恐怖せしむ
（土屋文明『山谷集』）

以上、「鶴見臨港鉄道」二十一首の中から引いた。次に『群鷄』に戻る。小題「どろの木 川崎工場地区一」六首と「煤 川崎工場地区二」十一首の中からそれぞれ二首ずつ引く。

砂の上に起重機の影来し見れば重々と黒き鉄を下
げたり

どろの木の一二本の間にして青空は見ゆこころ恋
しも

梅雨遅き暑き日射の町出でて空気荒れたる埋立地
を歩む

早苗田の泛きたる苗に寄る煤の片寄りにつつタづ
きにけり

文明の「鶴見臨港鉄道」一連は昭和八年に、宮の「どろの木」「煤」はややこれに遅れて昭和十四年に作られている。紙幅の関係で引用は控えるが、『群鷄』には「平炉現場」という小題を付す、製鋼所の現場を詠ったリアルな一連もある。「鶴見臨港鉄道」も「どろの木」「煤」も近似した素材を扱い、共に広義の意味でのリアリズムを軸としているが、違いはどこにあるのか。文明は宮より二十歳以上年長であるが、『山谷集』が編まれた頃は、旧来の日本的美意識といった境地を退け、「歴史的な現実や事象をつかもうとするリアリズム」（篠弘『現代短歌全集 第七巻』解説）へと移行し、

散文的な発想と破調による即物的な歌い方に転じていた。時代との関わりを強く求め、主体が横へと広がりを見せていき、危機意識を内包しながら社会思想、社会批判へとリンクしていく。これに対し宮の作は、淡々と事物と自己を描き出し、主体が縦に向かって降り立ち、更に奥へと向かおうとする。一首目、対象が「重々」と把握され、二首目には「こころ恋しも」という心理が描かれる。三首目は殺伐とした景色と内面が一体化したような作である。四首目の「夕づきにけり」には、景色の抒情的な奥行きが描かれる。動く心と景色を照応させながら、外界の景の中に自己の内面を暗示的に重ね合わせて詠っている。文明のように自己の内実を外に広げていくのではなく、孤に執し、対象に自己を沈潜させていく。後年、戦闘と敗戦という過酷な実体験を契機として、より一層深まるこうした宮の作歌態度と理念が、無機質的な埋立地の風景を素材としたこれらの歌に現れているように思う。リアリズムでありながら、当時大きな影響を与えていた文明調リアリズムとは距離をとっていたことが、これら青年期の作品から理解できることを、あらためて確認しておきたい。

以上、粗々ではあるが『群鷄』において登場する横浜と、隣接する川崎を素材にした作を通して、宮の作風の原点を探ってみた。所与の枚数がもうすぐ尽きる故、例歌を挙げることは叶わないが、二冊目の歌集『小紺珠』において「鶴見町六〇二の家」「川島町界限」との詞書きを付す作、第四歌集『晩夏』においては野毛山の街や保土ヶ谷の景を詠ったユニークな作が見える。

居住していた横浜という土地から、戦前また終戦直後、代表歌となる数々の作が生まれ、発信されていたことを記して、この稿を閉じたいと思う。

岡部桂一郎に寄せて◎高橋みずほ

1. 緑向く椅子

ちよど十年の月日が流れる。横浜歌人会会報百号のインタビュで岡部桂一郎さんのお宅を角宮悦子さんと訪れたのは十月初め、残暑の厳しい年だった。

岡部さんの家のあたりは谷戸といい、竹群だったひと山を切り開き、人が住み始めたような素朴さがあつた。車一台がやっと通れる急な坂道を上る。一步一步踏み締めながら何を考え、思いめぐらせていたのだろうか。ここを歩いているだけで、岡部さんに触れる思いがする。

こつこつと靴のかかとを鳴らしゆく人をこころに追う月夜かな

玄関を開けるとまっすぐに伸びる廊下の先にダイニングキッチン。その向かいに、谷間を隔てて新橋宮古公園の森。岡部さんの椅子は森を見つめていた。ここで夫人の由紀子さんのインタビュを始めた。通り抜ける風は心地よく、軒の風鈴の音が軽やかに鳴る。まるで、岡部さんが相槌を打つかのようだった。

この部屋の真上が書斎で、大きな本棚（淡い水色の箱から、短冊のような紙の切れ端などに書かれた未発表の歌が出てきた）、公園側の角に座る木の机、木のロッキングチェアがある。岡部さんの緑向く姿を思う。孤高という姿は、つねに在る意味を問う。

休まんと体の影の近づけば木製の椅子緊張をせり

2. 喜びと誇り

岡部は、山下陸奥主宰の「一路」に所属していたが、昭和二十三年に仲間と辞め、「工人」（昭和二十七年まで）を創刊する。まとまった形で文章を残してはいないが、ときどきに書いたものからどのように短歌と向き合おうとしていたかを読み取ることができる。

昭和二十四年の二つの文章をみてゆこう。

短歌に志すものが短歌をやることが何故非常な喜びとならないのか。歌づくりであることがなぜ無上の誇りを感じさせないのか。「業余のすさび」という言葉がなぜ悲哀をともなつて僕をうつのか。しよせん、短歌本来の姿なのであるうか。それとも僕自身の姿なのであるうか。

編集後記「工人」二月号

岡部の嘆きは、現在でも同様に感じることもある。例えば、自分の表現に対し、「これでいい」と確信する瞬間がある、どんな世界であつてもこの心の高まりが聴こえてくる一瞬があるはずで、人はそれを信じて邁進するのだと思う。短歌をつくることの喜びも、歌人であることの無上の誇りも、この一瞬からもてる。

短歌の世界では、そう思うことが難しいのかもしれない。形式があるため、そのなかで言葉が整つてしまふ。確信する前に形式が韻律、リズム、句切れなどを伴い言葉を仕上げてゆく。その言葉は言葉以上の力をまとい、三十一音という空間を築く。けれども韻文の

言葉は、形式のなかで育つものではない。

斎藤茂吉は『寒雲』の巻末記に、作歌を「業余のすさび」と表現するが、その語りに歯切れの良さはなく、短歌は趣味その延長上という理解が一般にあるが、言葉の造形という内なる無限へ向かう芸術という理解はない。そう位置づけられることに茂吉や岡部には不満がある。韻文の言葉が何を担っているかを知るからこそ、「業余のすさび」に哀しく内を震わせる。

3. 尖端の存在

岡部が何を表現し、目指そうとしたか、その一端を知ることができる文章がある。作品とともにみてゆきたい。

僕の考える短歌の表現では、ある物体が存在するということは視覚による認識を云うのではない。ものが存在するのはそのものの自体の荷なう「意味」だ。例えばいまこの机の上を照らしているランプが一つあるが、このランプは今この地上にひとつしかなく然も僕との距離とか時間とか関係に於てごく限定された現れ方をしている。このランプが僕の眼の前に存在しているということとは、ランプの背後に混沌とした廣大きわまりない底辺の重量をもつた意味内容がするどい尖端として具象化したものだつまりここにランプが存在するとは、ランプが僕につきつける意味内容を明らかにめてゆくことである。ものが荷なう廣大な混沌とした深い底辺が果してどんなものか見当もつかぬが、僕は漠然とした一種の恐怖を感じている。

編集後記「工人」八月号

冬の夜の路地に七輪の火あかくして大戦を経し吾

たちつくす 十一月号

薄明の下ながれくる源流の奥へ奥へと山重なり 二月号

七輪の火は、吾の眼に大戦を呼び起こす。平和な時代にそれを連想することは、未来の漠とした怖れも感じ取っている。流れくる源流の水を見つめる視線はその奥を辿り、山の連なりを結ぶ地下の水脈へと向かう。

七輪の火には過去・未来の怖れという静止した時間と空間が、源流には水脈を繋ぐ広大な時間をとまなう空間がある。岡部は、ものの存在とは七輪の火や源流に畳まれている時間、空間にある事柄が重要な意味をもつことを指摘する。

鳥獣の声も絶えたる現世^{げんせい}に山々そびゆ新しき物質として 二月号

鳥獣の声が聴こえる山は情感を呼ぶが、「物質」という言葉はそれらを切り捨てて、存在する山の成立や構成する要素から考えさせる。生きものの声が全て絶えたかに見える現世に聳える山々是不気味だが、内へ向かう視点には地球、宇宙といった不確かなものと繋がりを感じさせてゆく。

岡部の言葉は多くを語らないが、その背後に深い空間を含むものとなっている。

4. 赤き魚

昭和二十四年十月号の編集後記では、岡部は「自分の感じたものを明確にたしかめるために歌をつくる」と語るが、同年九月号の「赤き魚」から四首を引用し、確かめたい。

一群より離れし蟻がふらふらと耐えながら暗き草むらに入る

かたむきしままの地平がそびえつつ露台に昏るる金魚鉢一つ

日の沈み終りし空に月にじみガラスの鉢に透く赤き魚

すれすれに天の川とどろきゆける時露臺にゆがむぎやまんの鉢

赤き魚は、日没の空に月が滲み、藍の暗がりを透かすガラスの鉢のなかに鮮やかで、存在感がある。

同年二月号「みちのく」、四月号「ひとりの旅」には、好意をもっていた女性を東北まで追いかけて行き、達せられない思いに触れた作品がある。

当時、由紀子（当時中村）さんは、岡部への想いを歌にする。

昏れはてしつめたき鏡に面ふせて憎めというかこらえきれねば 新年号

灯の消えし螺旋階段のぼりきて星まもる間もただに逢いたし 新年号

青桐の幹ほのじろく頭文字^{イニシャル}が刻まれて風のつりくる夜 二月号

人並みの幸福をねがい靴打てば君すら切なき夜もあるならん 五月号

緑暗に身の染むまでを黙しいて争いのごとく抱きて別れき 十一月号

岡部をひたすら待つ。「君すら切なき」は山崎方代への歌だろうが、同時に自らにも人並みの幸福を願う、岡部を恋う。八、九月号では、由紀子さんは欠詠する。

さきの九月号、岡部の作品の「蟻」は、自らを投影したものではないか。それに続く三首には、金魚鉢を揺らす作品の間に、赤き魚はくきやかに描かれ、微動だにしない。このとき岡部は「感じたものを明確にたしかめる」ことを作品と構成から試みたのではない。赤き魚。金魚は、由紀子さんと思う。

十一月、結婚式を挙げて二人は暮らし始める。

5. 在る美しさ

岡部さんを施設に入れることを由紀子さんは、罪のように思っていたので、毎日通えるところを探した。

岡部さんのインタビュのため、その道を歩いた。

谷戸という地形の高台から、一気に手すりつきのコンクリートの階段を下る。それから団地の間のゆるい上り坂を歩き、さらに車道の急な坂の中ほどに突き当たり、下る。その坂下に施設がある。ここを毎日通うその思いに、胸が熱くなった。

忘れられないことがある。岡部さんがもっていたものを落としたので、拾って渡した。「ありがとう」とやわらかな関西弁でお礼をいわれた。その声があまりにも、少年のように澄んでいた。息をのんだ。純粹さ。どんなときにも、純粹であることを努力されてきたのだと、その声を聴いて思った。涙が出そうになった。淡々と自分の選んだ道を歩き、そこに何があるうと自分の言葉を信じてきたこと、その姿は美しかった。

人が一生を終えるとき、どんな姿を見せられるのか。どんな言葉を残せるのか。言葉は書き手ありのまま映し出し、そして生き続ける。岡部さんは言葉の怖さも、言葉の豊かさも知っている歌人と思う。

*引用…「工人」以外は『二点鐘』（青磁社、二〇〇二年）。

山崎方代と横浜◎田村元

昭和二十八年、横浜の関内駅のほど近く、現在の鰻屋「わかな」の隣あたりに、「ホースネック」という名の画廊喫茶がオープンした。店主は元新聞記者の牧野勲（筆名は牧野イサオ）という人物で、彼はこの店を拠点に数々の文化事業を企画・運営していき、横浜の文化界の世話役のような存在になっていた。

二年ほどで店の二階にあった画廊は閉められ、その後は、実質的には酒場として営業されていたようだ。店の名物は店名の由来にもなった「ホースネック」という名のカクテルで、焼酎にジンジャーエールを加え、レモンを一切れ浮かべたものだった。

店には多くの詩人、歌人、画家、作曲家らの文化人が集まったが、山崎方代も常連客のひとりだった。

方代は、晩年を鎌倉で過ごし、今も鎌倉の「瑞泉寺」で方代忌が開かれるなど、「鎌倉の歌人」というイメージが強いが、実は住んでいた期間は、鎌倉よりも横浜のほうが長い。

『山崎方代全歌集』（不識書院）の「年譜」をもとに、方代の居住地の変遷をたどってみよう。

方代は大正三年、山梨県の右左口村に生まれた。十八歳頃から短歌を作り始め、二十二歳のときに結社「一路」に入会している。方代が横浜に住むようになったのは、昭和十三年、二十四歳のときである。前年に母が亡くなり、父とともに、横浜市浅間町の姉、関くまのもとに引き取られたことがきっかけだった。その後の方代の生活の拠点がどこにあったのかはつきりしないが、昭和十六年から二十一年までの出征期間や、

戦後の放浪生活などを経て、昭和二十五年、三十六歳のとき、姉、関くまのもとに落ち着き、関歯科医院にて歯科技工を手伝うようになる。その後、昭和四十年、方代が五十歳のときに姉が亡くなると、関家での居候生活をやめ、横浜市内の数力所を移り住むことになる。昭和四十七年、五十八歳のときに、「鎌倉飯店」店主根岸悦雄が鎌倉市手広の自宅敷地内に用意した四畳半の住宅に転居し、以後、昭和六十年に七十一歳で亡くなるまでの棲家となる。

方代が横浜に住んでいた期間は、少なく見積もっても、関家に落ち着いた昭和二十五年から昭和四十七年までの約二十二年間、対して鎌倉に住んでいたのは、昭和四十七年から昭和六十年までの約十三年間である。横浜に住んでいた期間のほうが、鎌倉に住んでいた期間よりも、十年近く長いことになる。

方代が第一歌集『方代』を刊行した昭和三十年も、その後、鎌倉の吉野秀雄と頻繁に交流を重ねていた時期も、「実質的な方代の歌壇へのデビュー作」（大下一真『山崎方代のうた』短歌新聞社）となった「方代の歌」五十首が、「短歌」昭和四十二年十月号に掲載されたときも、方代は「横浜の歌人」であった。

方代のエッセイ集『青じその花』（かまくら春秋社）に、横浜時代のことを書いた次のような文章がある。

その頃の横浜、元町で詩人の扇谷義男、古沢太穂、近藤東、長島三芳、山田今次、高見房太郎（筆者注・高見保太郎の誤記か）、飯岡幸吉、秋元不死

男、尾山篤二郎、独立美術の松島一郎氏らと知り合った。ジャーナリストの牧野勲さんは馬車道の運河のへりで「ホースネック」という酒場をひらいていて、作曲家の高木東六先生はよく飲んでいった。

他にも、小説家の山本周五郎や、歌人の宮柊二、金子一秋らとの交流が、横浜時代の思い出として記されている。方代の話によく「嘘のまこと」と評されたり、エッセイにもかなりフィクションが含まれている可能性がある。そのため、方代自身が語る伝記的な内容について、そのまま鵜呑みにするわけにはいかないが、右に引いた方代のエッセイに名前の出てくる詩人の長島三芳による文章（『方代研究』第二十四号、第二十五号）や、牧野勲所蔵の資料をもとにまとめられた「報告書 横浜の文化人と戦後復興」（横浜市史資料室）などを読むと、方代が「ホースネック」で詩人たちと交流を持っていたことは、間違いのない事実である。

方代は、第一歌集『方代』をラッシュアワーの東京駅や横浜駅で見知らぬ通行者に配ったときのことを振り返り、「全く歌を作らない人、歌を読んだことのない人に自分の歌を読んでもほしい。こういう衝動の結果であったのだろう」と書いている（『青じその花』）。こうした方代の、歌壇を超えた読者を得たいという「衝動」は、「ホースネック」での詩人たちとの交流から生まれたものかもしれないし、あるいは詩人たちとの交流の動機だったのかもしれない。実際、後年に、方代の短歌は歌壇を超えた読者を獲得することになったが、そのことと、「ホースネック」での詩人たちとの交流とが、全く無関係であるとは思われない。

ぼくの住む町◎吉野裕之

横浜市全図を広げぼくの住む町の大きさ確かめて
いる

古いノートを見てみると、一九八九年六月五日の日付があり、隣には「外つ国はへ血の日曜日」 六月のピアノは重き音を出しつつ」が置かれている（ともに『空間和音』（砂子屋書房、一九九一年）所収）。昭和が平成に変わったこの年の四月、私は青春の八年を過ごした福岡から横浜に戻ってきたのだった。

子どものころから理科が好きで、将来は「科学者」になりたいと思っていた少年は、生まれ育った横浜を離れ、遠い福岡で学生生活をはじめた。大学の授業は思ったより厳しく、一年半の教養課程を終えたとき、成績が理由で、専門課程は志望の学科に進むことができなかった。それでも大学院の入学試験にはなんとか合格でき、「科学者」の一步を踏み出せると、とてもうれしかった。しかし、ほんとうにわかったのは、大学院に進んだ二年目。木材化学を専攻していたのだが、化学の、もつといえれば自然科学のセンスがないことを、はつきり自覚したのだった。おそらく、気づいていたのだと思う。気づいていても、気づかないふりをしていたのだ。苦しかった。

*

大学の友人・H君に誘われ、今村俊三の指導する句会にはじめて参加したのは大学院に進んだばかりの

一九八五年五月。実はその二、三年前、私たちはひょんなことから俊三に会っており、彼は句会に熱心に足運ぶようになっていた。私は短歌をつくっていたので誘われなかったのだと思うが、新たに若い人たちの句会が発足し、H君が声をかけてくれたのだ。

白木槿いのちは息にほかならず 俊三
いかづちの鶏頭枯るる音したり
十葉や息して眉の重くなる
老僧もかつて兵たり花ざくろ
山笠や雷雨のちから樹々も溜め

私は、即物的、無機的な作品と同時に、抒情的な作品も多くつくる俊三に、あつという間に惹かれていった（作品は『摘花集』（桃滴舎、一九八八年）所収）。そして、ふたつの詩型にかかわるようになった。

学生時代だけと考え福岡に来ていた私は、横浜に戻って就職するつもりでいた。しかし、子どものころからの夢がかなわぬことがわかり、どうしたらよいのかわからず、指導教官が薦めてくれる企業への就職も断り、修論のための研究も進まないまま、日々を過ごしていた。

もうすこし俊三のもとにいよう。福岡に留まり、俊三のもとで俳句を勉強しながら、ゆつくりと将来のことを考えてみようと思った。幸い進学塾の講師の職を得ることができた。仕事は楽しかったが、激務だった。臍臓を悪くしてしまい、一年経っても完治しな

かった。また、十代から抱えていた正中頸囊胞の大きさが限界に来ており、そろそろ手術が必要になっていた。答えを見つけれないまま、横浜に戻ることにした。

*

あのときの「横浜市全図」はいまも手元にある。一九八九年一月発行の昭文社のもの。三分の一なので、半畳よりすこし大きい。「ベイブリッジ建設中」「みなとみらい21（造成中）」「市立美術館（建設中）」といった文字が見える。また、「青葉区」と「都筑区」はない。

「ぼく」は何を確かめていたのだろう。「ぼくの住む町」。それは根岸。母方の代々の土地。けっして広くはない範囲に、丘と平地と海が同居しながら、その襷にはさまざまな時間が折り畳まれている、そんな魅力的なまち。

「大きさ」。それは、しばらく離れていても、親しくゆつたりと迎えてくれる、そんな大きさのことだろう。その大きさに対する感謝の気持ちを、こう表現したのではなかったか。そして確かめていたのは、横浜のそれでもあったと思う。一九八九年は開港一三〇周年の年。同時に市政一〇〇周年の年。そう、横浜の、過去の豊かさとも未来の豊かさを繋ぐ年。

「ぼくの住む町」。それは根岸であり、横浜でもある。前者は日常、後者は非日常。あるいは、前者は具体、後者は抽象。そんな言い方ができるかもしれない。そしてときに、ふたつは入れ替わる。

あれから三十一年が経った（おお、三十一、年！）。二十代だった青年は、来年還暦だ。おそらく、これからもここが「ぼくの住む町」。そう思う。

自動車ぎらいが運転免許をとった◎嵯峨直樹

数年前、運転免許をとった。

それまでは、交通機関が発達している首都圏で自動車を持つ事にどちらかというと否定的だった。車の維持費はもちろんガソリン代も馬鹿にならない。賃貸の一戸建てにはガレージが無いため月極駐車場を借りる必要もある。月極駐車場だと月一万以上。どう考えても無駄な出費に思えた。

そもそも、近くのバス停からバスに乗ればパチンコ屋がひしめく伊勢佐木もすぐだし、数分歩けば赤くてスマートな電車の駅がある。

京急線は完璧な路線だと思う。品川、川崎、横浜、黄金町、上大岡といった色合いの大きく異なった都市を高速でつなぐ。首都圏の風景から工場地帯、おしゃれな街、怪しげな街…、都市の多様性の全てがそろっている。

更に下れば歴史を感じる金沢文庫、風光明媚な八景島である。成田空港もこの線にあるのだから鉄道として完璧すぎるではないか。中央線沿いにも住んでいた事があるが同じような匂いの駅が続きここまでバラエティーに富んではない。

これ程恵まれた鉄道の沿線にいるのだから自動車などいらないし、自動車を持つている人をコストパフォーマンスに疎い愚かものと思っていた。

それでも自動車免許が必要になったのは、実家の父の緑内障がひどくなり車を運転できなくなったからである。父は長く緑内障の治療をしていたが、短期間に急に症状が悪化し、ものがはつきり見えなくなった。

人の顔がはつきりと見えない。彼は乃木坂46が好きだったが今はテレビにくつくようにしないと顔の判別がつかない。幸い失明はまぬがれ、日常生活は送れているが、ものがぼやけた視界では自動車の運転はとうてい無理だ。緑内障は遺伝する。父の兄弟や私のイトコも緑内障が多いが彼の急激な悪化をきっかけに、その治療に熱心になった。

洪々であったが免許取得のために送迎のマイクロバスに乗り、教習所に通った。

実のところ私はそれまでに二回、途中で教習所に行くことなく返金してもらった前科がある。幾つか理由があるがそもそものモチベーションに欠けていた。唯一のモチベーションは田舎に帰った時に同世代のイトコに馬鹿にされたくないという事だった。田舎は自動車に乗らないとどこにも行けないので、自動車免許を持って一人前という風潮がある。免許がないからイトコに乗せてもらうのは、ちよつとした屈辱だった。しかしこれでは教習所に通い続けるという苦行を続ける動機としては弱かったのだろう。

しかし、今回は生活の必要が切迫しており、真面目に通わざるを得なかった。教える気がない教官、たかが運転ができるくらいでどういうわけか偉そうな教官、イレギュラーな事をお願いすると感じが悪くなる受付。それらの理不尽を受忍して無事運転免許を無事取得した。

車は運転に自信がないのでマツダ・デミオというコンパクトカーを購入。家の近くの駐車場と会社近くの

駐車場を借りて会社への通勤にした。私の初めての愛車の深い藍色のデミオは実にかっこいい。マツダはデザインがいいんだよねとほんの数か月まで車への興味が無かったばかりか車持ちを馬鹿にしていた者ならぬ気に入らうだった。

免許をとって最も喜んでいたのはその頃高校生だった息子だと思ふ。進学塾の帰りに、それ程の必要性を感じない場合でも、迎えに来て欲しいとメッセージが入った。今思うとほとんどの親が自動車を持つている中で、車の無い親を持つ彼は小さい頃から肩身が狭かったのではないか。「お前の父ちゃんの車何？」と聞かれて言葉が詰まった事があったのではないか。迎えにいくと友達がいって、迎えにきた車を見せつけている印象であった。もつとも彼はコンパクトカーではなくレクサスやらの大きく立派な、つまり高そうな車が良かったらしい。友人に自慢したかったのだろう。経済的な事もあるが私にはそもそもあんな巨大な自動車を運転する技能がない。彼は帰り路の自動車の中で自分の好きなラップをかけて終始テンションが高くご満悦であった。

自動車免許をとってから行動範囲が一気にひろがった。以前はバスを乗り継いで行っていた三溪園、近場だがバスがなかった極楽湯、ニトリなどの郊外型の大型店舗。思い立って車に乗ればどこにも行ける便利さはやはり魅力的だ。

湘南の海沿い道も妻を乗せてドライブした。片側はずっと穏やかな海が見え、砂浜で遊んでいる連中の姿がきらきらと見えて素敵だった。

最近はある素敵な赤い電車にめつきり乗らなくなった。あれだけくさしていた車の雑誌やら動画で新しく出た車をチェックする日々である。

丘の上の英連邦戦死者墓地 ◎ 山本登志枝

遅い梅雨が明け、夏となった八月初旬、保土ヶ谷の駅からバスで十五分ほどの小高い丘の、木立に囲まれている英連邦戦死者墓地を訪ねた。門を入り緩やかな傾斜を少し下ると石造りの記帳所があり墓地が開ける。まず記帳した。その日は私で二人目、前日は一人が記帳していて、訪れる人は少ないようだ。

英国には異国に果てた戦死者を本国に送還せず、現地に葬る決まりがある。世界各国の墓地の中でも横浜の墓地はとりわけ広いということだ。

いちめんの芝生の中に、十字架の塔を遠く置き、無数の墓石が並んだ墓地が夏の午後の光の中に広がっていた。墓石はみな同じ規格の小さな角型で、そのおのおの傍らには薔薇が植えてあり、赤い花が咲いている。墓石、薔薇、ところどころにいろいろな植物の植え込みがあり、整然と何列も並んでいる。門に入りすぐのその墓地にはイギリス区の立て札があった。スケッチをしているらしい人が一人、中ほどに立ち、植え込みの手入れを一人黙々としている人が遠くに見える。鴉が一片芝生の上を歩きまわっていて、蜻蛉の群れが水の中を泳ぐように舞い、木立より蟬の声が聞こえてくる。静かなところだ。

八万平方メートルと広い英連邦戦死者墓地はイギリス区、オーストラリア区、カナダ・ニュージーランド区、インド・パキスタン区、戦後区に分かれていて、約二千人の人が葬られている。

英連邦諸国とは英国と旧植民地諸国などで構成される緩やかな連合体で、植民地が独立した現在では、対

等な主権国家同士としての友好関係を築いているという。第二次世界大戦がはじまった当初は日本軍が優勢で、東南アジアと太平洋のかなりの地域を占領し、その進軍中に拿捕し、日本に連行した連合軍兵士や、地元民間人の三分の一の人が抑留中に命を落とした。炭坑や、工場、港湾などに連行され、過酷な労働で命を落とした人も、戦争末期の連合軍の空襲や艦砲射撃により命を落とした人もいるという。戦後に進駐軍として駐留中に死亡した人、朝鮮戦争の犠牲者が戦後区に葬られているのだという。

墓地の緩やかな起伏に沿い、それぞれの区域に足を運んだ。石段や、石道の両脇にはエリカや白百合の花、いろいろな植物が植えられていて手入れが行き届いている。どの区域もきれいに芝生が刈り込まれていて、芝を刈った後の草の匂いがなつかしくした。

終戦後、日本に上陸した進駐軍は、児童遊園地であつたこの場所を接収して、墓地を造成した。この土地はその後占領が終了したあとは、日本が英連邦に三十年間無償で貸与する協定が結ばれ、以来その期間の更新が続いているのだという。

墓石にはそれぞれの国の言葉で名前や年齢が記されている。十九歳、二十三歳という年齢が目につく。戦後生まれの私の知る戦争は、父のボルネオ島での体験談や、浅草にいた母の東京空襲の時の話、長崎、広島、沖縄、そして香月泰男のシベリアシリーズと敗戦国としての戦争であり悲惨さであつた。かつて「紅いコリーヤン」の映画を見たとき、あの残酷な日本兵

は私の父であり、叔父であつたかもしれないと思つたことはあつた。ここに眠るまだ十九歳の若者を殺したのはやはり私の父であり、叔父であつたかもしれないこと、私であつたかもしれないことが思われ、人間の犯す戦争の恐ろしさと思われた。戦争は誰もが被害者にも加害者にもなり得るのだ。

墓地を一巡りして再びイギリス区に戻ってきた。スケッチをしていた人はもういなくなっていたが、まだ黙々と夏日のもとに庭の手入れをしている人と、歩き回っている一羽の鴉と、泳ぐように舞っている蜻蛉の群れが見え、蟬の声がしている。永遠に薔薇の花の咲く、静かな明るい追悼と平和への祈りの場所であつてほしいと思いつつ帰路についた。

八月十一日の新聞の朝刊に、八月一日英連邦戦死者墓地で、追悼の礼拝があつたという記事が載っていた。捕虜の拷問に立ち会つたこともある元日本兵の人などが戦後五十年の一九九五年に呼び掛けて、「過酷な強制労働の末に亡くなった捕虜らをしのぶ」ため酷暑の八月に墓地で追悼礼拝を行うことを決めたのだという。「被害者が忘れたとしても加害者は謝罪の気持ち忘れてはいけない。そうすることが、犠牲者の慰めとなり、和解につながる」という信念の言葉は重い。そしてこの呼びかけがきっかけとなりこの墓地が追悼の地としてだけでなく、日英の和解の場としても知られるようになったのだという。

記事には、八月一日の追悼礼拝には、市内の高校生二十人も参加したが、その高校生の「授業で習ってきたのは、原爆などの被害が中心だったが、一方で加害もしている事実を知ることができた」「戦争を体験した人の証言を積極的に聞きに行つて語り継いでいきたい」という言葉が載っていた。

渡辺松男のみなとみらいの歌◎鹿取未放

渡辺松男は古代的な脳を持った人である。渡辺の歌をアニメズムと呼ぶ人もあるが、アニメズムという狭い範疇には収まらない幅と深さ、大きなスケールを持つ歌人である。多く樹木を詠っているが、樹木の歌だけをみてもその幅の広さと豊かさが分かるだろう。

再会の山毛櫸の樹幹を抱くときその悦びのぐぐぐと春
『寒気氾濫』

樹は内に一千年後の樹を感じくすぐったくてならない春ぞ
『寒気氾濫』

無といわず無無ともいわず黒き樹よ樹内にゾシマ長老ぞ病む
『寒気氾濫』

憂鬱なるわれは櫸の巨人となり来るクルマ来るクルマひっくりかえす
『歩く仏像』

釣り合えよ 今日死ぬ鳥のきょうの日と千年生きる木の千年と
『泡宇宙の蛙』

木の直立をうたがわぬ人にきょう会いて退屈はわれを震えあがらす
『けやき少年』

素直に樹木と交歓しているようで、おおらかな相間の要素を含んだ歌、樹の本質を体感的に直観で掴んだ歌、哲学的で思索性の深い歌、漫画チックな形をとった社会批評の歌、生命の本質に迫り、静謐で祈りにみちた歌、辛辣な風刺の歌など、樹木をうたつても全く一様ではない。そしてそれらの歌は多くユーモアをたたえているのが渡辺松男の特徴だ。

ところで渡辺松男の第一歌集『寒気氾濫』（一九九七

年刊）にみなとみらいをうたった『精神現象学』（題の二重カギ括弧はママ）一連九首がある。

①革靴でバスを降りれば水つぽき低地なり「みなとみらい21」地区

②八方から意馬心猿のごときもの圧力はビルを高く高くす

③超高層のカーテンウォールのとの曇り求愛飛翔の鳥を見ぬなり

④高さ二百七十三メートルに働くおみなあり新竹のごときしなやかな脛

⑤『精神現象学』的巨大ビルを染め真鍮色の日は落ちてゆく

⑥「みなとみらい」のこんな街路灯の一本がかのダム底の家より明し

⑦むかし疎外ということばあり今もあるような感じに吹けるビル風

⑧赤城山から双眼鏡に見ゆるもの霜の柱の新宿のビル

⑨捨てられし自動車が野に錆びていて地球時間に浸りていたり

五首目の『精神現象学』的巨大ビルとは、『寒気氾濫』上梓の四年前に開業した横浜ランドマークタワーのことである。七〇階建て二九六・三三メートルの横浜ランドマークタワーが『精神現象学』の象徴としてこの一連を統べていることをまず確認しておきたい。

さて、この『精神現象学』一連はいわゆる「リアリズム」として読めそうな歌が多いが、リアリズムで読めそうな歌を易しいと思っていると陥穽に落ちるかもしれない。渡辺松男は「吹けばかまきりの子は飛びちり あなたははりありずむのめがねかけているだけ」（『〈空き部屋〉』）という辛辣な歌も詠んでいるからである。逆に一連には哲学用語が使われていて難しそうにみえる歌もある。そこで、『精神現象学』九首を便宜的にA群「リアリズムで読めそうな歌」：①、③、④、⑥、⑧、⑨、B群「難しい用語が入った歌」：②、⑤、⑦の二つのカテゴリーに分類してみた。

では、リアリズムで読めそうなA群の歌から見てもよい。①、一連の導入のために革靴というリアルを提示し、まず「へわれ」の属性を示している。みなとみらいはもともと造船所のドック跡地を埋め立てたもので「水つぽき低地」なのだが、じめじめして、「へわれ」には居心地が悪いようだ。

③、超高層のカーテンウォールという危うげで美しいものを掲げる一方、求愛飛翔の鳥を見ないという。スピード感のある鳥のつがいの飛翔の姿を一瞬見せて消す手法は鮮やかで、「との曇り」の選択も心にいく。可憐な鳥を見せ消ちにして生命の営みがせき止められる巨大な人工物の危うさをうたい、知と情の調和がとれた姿の美しい、豊かなふくらみのある一首である。

④、この「二百七十三メートル」は六十九階展望フロアー。そこに「新竹」に比喩される女性を配しているが、足や脚ではなく「脛」という語の選びが、いつそう健やかなエロスを匂わせる。そして「へわれ」が見かけたこの「おみな」だけが一連では体温を持ち、生命の輝きを放っている。⑥、ダム底に沈んだ貧しい家の灯りを懐かしがるのは、人工の街への身体的な拒否感のゆえだろうか。さて、歌集では⑦と⑧の間に*

入っていて、⑧、⑨の歌はみなとみらいから離れる。
⑧、赤城山というどっしりした自然に立つて双眼鏡で見た新宿のビルを霜柱で暗喩し、そのもろさを想起させる。⑨の棄てられた自動車に流れる地球時間は、人類滅亡後、廃墟となる新宿や横浜、ひいては世界中の大都市に林立するビル群に流れる永遠のような時間にも重なるのだろう。

次に難しい用語を使ったB群の歌に移る。②の「意馬心猿」は、煩惱や欲望などの抑えがたいのを馬や猿に例えた仏教用語。ランドマークタワーを外観のフォルムが美しいなどという一般的な見方から離れて、多くの人々の欲望の手が寄ってたかって高く高く押し上げた結果の産物だと本質に立ち入って捉えている。

⑤、『精神現象学』はヘーゲルの著作で「哲学の大伽藍」と称される。弁証法によって絶対精神に至り着く過程を詳述したこの壮大な書物は難解なことでも知られる。しかしこの『精神現象学』から出発してフロイト、ニーチェ、マルクスなど多くの思想家がそれぞれ独自の思想を打ち立てた。そんな思想の殿堂であった豊かな書物に人知の粋を集めて作られランドマークタワーを例えたのなら話は分かりやすいが、作者はそれを意馬心猿の、煩惱の産物だとみなしているのだから穏やかではない。そのタワーを夕日がしばらく華やかに染めてやがて海の彼方に沈んでしまう。『精神現象学』が現代ではかつての精彩を失ってしまったように、このタワーの未来の凋落を予見しているのだろうか。⑦、「疎外」はもととはヘーゲルの用語だが、マルクスは「自己が作ったものによって支配される状況」という意味でも用いている。海を埋め立て、自然を壊して作られた偽物の街、そのビル群に取り囲まれた圧迫感、いたたまれなさが「疎外」なのだ。

A群、B群に分けて解釈をしたので、一連の流れが

滞ってしまったが、意馬心猿の心の産物であるランドマークタワーを擁するみなとみらいに降り立ったへわれは、そこに生命の潤いも輝きも感じられず、強烈な疎外感を覚えている。一連で人間中心主義を鋭く批判し揶揄しているが、古代的な脳を持った作者にとつてそれは当然の帰結だろう。

それでは、渡辺松男の資質が『精神現象学』一連に十全に開花しているかというと、そうではないだろう。冒頭の樹木をうたった大きな豊かさと比較すると『精神現象学』一連は固く、瘦せた印象を受ける。文明批評が表に出すぎているくらいがあり、渡辺の美点の一つであるユーモアが影を潜めているからだろう。

では、どういう歌が渡辺松男の真骨頂かと問われるとなかなか難しい。それをくみ取り、解説するだけの知識と心の深さが私には不足しているからだ。次の項では、生命を問う歌に焦点を絞って読んでみたい。

したうけのそのしたうけのしたうけのさげふぬんぬるツぬるツと被曝す 『雨ふ』

夢にわれ妊娠をしてパンなればふつくらとした。パンの子を産む 『泡宇宙の蛙』

ああ母はとつぜん消えてゆきたれど一生なんて青虫にもある 『泡宇宙の蛙』

おばあちゃんお寺なんてみな嘘ですねミトコンドリア・イブのおばあちゃん 『泡宇宙の蛙』

白鳥はふつくらと陽にふくらみぬ ありがとういいつも見えないあなた 『泡宇宙の蛙』

一首目、福島原発事故の歌。渡辺は追空賞受賞の第七歌集『蝶』（二〇一〇年刊）以降旧仮名表記だが「ぬるツぬるツ」の「ツ」を意図的に小さくして、不可抗

力に浸透してくる放射能の無気味さや破壊力の凄まじさを皮膚感覚で捉えようとしている。また、ひらがな表記は、政治や社会のシステムのいやらしさを伝える効果を狙っているのだろう。より弱い立場の人間を搾取し、その生命を粗末に扱う大きな力に対して抑えに抑えた憤りが呻きのように漏れ出た歌だ。

二首目は、夢やパンに仮託したユーモアあふれる歌のようでもあるが、天真爛漫に見える生命への希求の裏に、生命と直接的な繋がりに乏しい産めない性としての屈折があるのかもしれない。三首目は母の死を嘆く悲しみの極みで、一転して青虫にもある生命に気づき、その等質性に言い及んだところが小気味よい。

四首目のミトコンドリア・イブの歌は、一連にへ哇に座り口あけているおばあちゃん 満州は日の沈む方角などの歌があるので、目の前におばあちゃんがいる設定である。掲出歌の歌い出しはそのリアルなおばあちゃんに呼びかけているようだが、お寺の存在は人間に死を受け入れやすくしているシステムであろうから、その安寧を否定されたらおばあちゃんは困るだろう。しかし、この歌はリアルなおばあちゃんを通り越して、より多く「ミトコンドリア・イブのおばあちゃん」に向けられている。だが、「ミトコンドリア・イブのおばあちゃん」に應える術がない以上、作者自身が答えるしかない。それゆえ、ミトコンドリア・イブが象徴する生命の起源や連鎖の非情な絶対性に対して、お寺の欺瞞性を突きつける刃は結局作者自身に向けられ、否応なく読者も巻き込まれることになるのだ。

さて、最後にあげた白鳥の歌は、ミトコンドリア・イブの歌とはうってかわって全くの手放しだ。白鳥やへわれを存在させているへあなたに、その生命を投げ出し、全面的に委ねているからであろう。

師との想い出 横浜◎塚田キヌエ

コロナ禍の家籠りの中で想い出をたどりつつこれを書いていきます。自粛の中でまず先に、自分の好きな場所からです。

港の見える丘公園よりの眺望はすばらしく何よりの海です。展望台から見下すベイブリッジ、マリントワー、遠望等々、この公園の一角には秋は殊更美しく香る薔薇園があり、大佛次郎記念館もあります。フェリス女学院、山手の教会などに行くのも楽しみのひとつ。フランス山を通り、横浜人形の家でゆっくりと古い人形と話をし、じっと面を眺めたり、衣装に感激したり、初代館長は兼高かおる氏、二代目に石坂浩二氏、私はこの館が好きで必ず立ち寄る。山下公園の氷川丸は風格があり、昭和五年完成で、九十年、戦争時も活躍したらしい。山下公園には、現在も赤い靴の女の子像はるか海の彼方を見つめています。本当は異人さんに連れて行かれなかったこの話は有名である。波の音を聞きながらベンチに休息していると、カモメや鳩の羽音の降り来るこの栈橋いいなと思うつつ、今は亡き私の短歌の師である杉本三木雄氏のことを少し書かせていただきます。

師の教室は秋と春には吟行があり、根岸森林公園等に出かけました。師は大正四年（一九一五）七月、静岡県富士川町（現在の富士市）に生れる。幼い頃横浜に移住、二十歳の時、筏井嘉一創刊の「蒼生」に入会、のち「創生」と改名、その代表同人となる。神奈川県

庁に勤めながら、歌壇に活躍。長身の細身の笑顔のすてきな紳士でした。師は、平成二年六月十三日、くも膜下出血にて享年七十四歳。戒名三光圓融居士。静岡県富士川町に菩提寺があり、寺の名は清源院。

師の逝去に歌友とあじさいの咲く道を哀しく帰宅。師の歌集『日本大通り』はご自身の勤務先である県庁の所在地。私の好きな師の作品。

培はむおもひにいくつ拾いもつ「日本大通り」の
熟れし銀杏

先輩の歌友に誘われて、師のふる里の富士市の菩提寺に伺いました。そこには歌碑があり、富士川の風が心地よく吹き渡っていました。

故郷といふばかりなり富士川つつみのつばな風
になびけり

『天上地上』

目方五十五丈百七十弱瘦身吾が六十代に残る一年
ひとくぎりしたる思ひ七十年に加えるひと日ひと
日短き

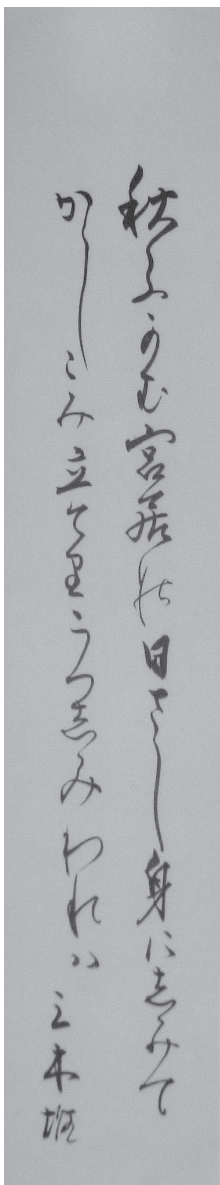
杉本先生のご指導のおかげで、現在の私が指折りつつも短歌を楽しんでいます。

昭和六十（一九八五）年、七十歳。十一月三日、勲五等双光旭日章を授与される。

秋ふかむ宮居の日さし身に志みてかしこみ立てる
うつ志みわれか

この短冊は教室で、いただいた大切な宝です。他に菊の紋のある煙草も。今はもう歌友も先生のみまかりし歳を越えました。

歩きつかれてホテルニューグランドに立ち寄り、ここにも大佛次郎（横浜生まれ）が十年も逗留した事を知る。作品は「帰郷」「霧笛」等々がある。今年はコロナのため、花見も出来ずに何もかも中止、私は旅行もキャンセル。桜木町の日本丸は海の貴婦人とも呼ばれ白い帆をいっぱいに広げてマストは豪華絢爛である。ランドマークタワー（二三六m）の七十階までを四十秒で連れて行ってくれる。千葉辺りまで見える。まだまだ散策の道筋いっぱいある。またの折りに。



＞ 当会初代代表委員の
杉本三木雄氏の短冊

まぼろしの笹下城◎真鍋正男

笹下釜利谷道路を走る路線バスに何度か乗って不思議な名前のバス停に気付いた。港南区笹下の「大橋」というバス停だ。近くに大岡川が流れているが川幅は狭く、「大橋」が架かるような川では無い。よく見ると、小さな橋の欄干の石に「大橋」と彫られていた。思わず笑ったが冗談で彫ったとは思えない。歴史的な由来があるのではないかと調べ始めて驚いた。笹下には、北条氏の家臣の間宮氏の居城があったのだ。戦国時代、北条早雲は敵対した山内上杉氏と扇が谷上杉氏に戦いを仕掛け、横浜駅近くの権現山に砦を築き、上杉氏は二万の大軍で砦を攻撃。激戦になったが、間宮氏が目覚ましい活躍を見せ、早雲に認められて、相模衆十四家の筆頭として、北条氏の相模進出の最前線を任されるようになった。当初、間宮氏は川崎駅近くの堀之内に館を構えていたが、上杉氏は次第に勢力を失い北関東に退いたため笹下に拠点を移した。その頃、房総の里見氏の勢力が強まり、金沢区や磯子区の沿岸部に上陸するようになっていた。笹下城を築いたのは間宮信元公で、杉田陣屋、森陣屋、氷取沢陣屋を設け、笹下城を守るために港南区の高台に松本城と呼ばれる砦も築き、杉田陣屋を拠点に三浦半島の水軍を統括し、鎌倉街道や六浦道を抑えて敵の進行を防いだ。強固な守りに里見水軍は侵入を断念。その後、笹下城は息子の間宮康俊公の居城となった。康俊公は勇猛果敢な武将だったが、里見軍の侵入で焼かれた鶴

岡八幡宮の再建にも奉行として手腕を発揮した。天正八年、豊臣秀吉は天下統一の仕上げとして北条氏と開戦し、数十万の大軍で小田原城を包囲し各地の北条氏の支城を撃破した。間宮康俊公は箱根の山中城の支援に駆け付け、約二百人の兵力で豊臣軍の先陣二万六千人を迎え撃ち、敵に大損害を与えた末に討死。間宮氏の武名は全国に轟いた。徳川家康は、間宮氏の見事な戦いぶりを知り、笹下に残っていた間宮氏の一族を家臣に取り立てた。小田原城開城後、間宮信繁公は家康の直臣となり、鷹狩りや鷹の飼育法に明るかったので「鷹匠の総奉行」として仕えた。関ヶ原の合戦では信繁公は兵士と別に密かに鷹匠を随行させた。開戦当初は西軍の石田三成軍の大砲に前進を阻まれ、後方には敵の毛利軍の大軍が控え、東軍の家康軍は進退窮まっていた。西軍には内通の約束をしていた小早川軍の一万五千人がいたが、様子見をして動かなかった。後方の毛利軍にも内通者がいて毛利軍の下山を阻止することになっており、こちらの約束は守られていた。信繁公は鷹匠たちの機動力と情報分析能力を活用して敵の陣容をつぶさに観察し「前進しても安全」と家康公に報告。徳川軍は前進を開始し、小早川軍を裏約束の通り動かし、一日で戦いに勝利した。家康公は会う度にこの戦いを話題にして領地を増し信繁公は久良岐郡の統治を任せられ、相模旗本衆筆頭になった。北条氏の小田原開城後、間宮一族は本家・分家それぞれが独

自の道を歩み始め、康俊公の弟の綱信公は、分家して氷取沢間宮家の祖となり、徳川家の家臣となって氷取沢に陣屋を構え繁栄した。文化・文政期に幕府の昌平坂学問所地理局の事業として編纂された「新編武蔵風土記稿」は起稿から二十年をかけて完成した地誌で全二百六十五巻に及ぶ。編集の中心にいた地理学者の間宮士信は氷取沢間宮家の子孫で、数々の業績が評価され地理局の総裁となった。『解体新書』や『蘭学事始』で知られる杉田玄白の先祖の間宮長安は杉田間宮家の系統の豪族で小田原開城後は諸国を転々とし、後に杉田村に帰り、姓を「杉田」と改め、橘樹郡稲毛領に転居して長安寺を開いた。長安の孫の杉田甫仙は医師となつて江戸に出たが、甫仙は玄白の祖父で父の玄甫も小浜藩の藩医だった。樺太探検や間宮海峡の発見、精密な『蝦夷図』の作成者として知られる間宮林蔵は、笹下城主間宮康俊公の子孫だった。康俊公の五男の間宮元重は小田原開城後に常陸国筑波郡に移住し帰農したので、筑波の間宮家の子孫の林蔵は農民の子として生まれた。幼い頃から神童と呼ばれ地理や算術の才能を見込まれて將軍家のお庭番となり、北海道に派遣されて同地に來ていた伊能忠敬に師事し、測量技術や緯度測定法を学んだ。幕末の文化・文政期に活躍した三人の偉人が共に笹下城主間宮氏ゆかりの子孫であることを知り、感銘を受けた。旧久良岐郡には戦国時代から近代に至る貴重な遺跡や遺構が多数あったが、高度成長期以降は開発が優先され、保護も保存もなく調査すらされず宅地になってしまった。笹下城は谷戸の複雑な地形を巧みに活かした谷津構えの山城だったが、今では幻の笹下城と呼ばれている。往時を偲ぶ手掛かりは無く「大橋」の謎を解くカギも見付かつていない。

二〇二〇年度 総会＋新春歌会＋懇親会 ― 馬車道十番館の素敵空間で

〔日時〕二〇二〇年一月十八日（日） 13:00～18:50

〔会場〕馬車道十番館（横浜市中区）

〔総会報告〕

●新しい役員の体制

総会およびその後開催された運営委員会にて、新しい役員が決定しました。（任期：二〇二二年十二月まで）

・代表委員…桜井健司

・副代表委員…高橋みずほ、田村元、真鍋正男

・運営委員…鹿取未放、鯨井可菜子、三枝むつみ、嵯峨

直樹、塚田キヌエ、山本登志枝、吉野裕之

・監事…河北笑子、永平緑

〔新春歌会・懇親会報告〕

●気のおけない歌人たちが集まって――正古誠子

横浜歌人会新春懇親会は総会・歌会に引き続いて夕方から開かれた。

歌会での作者の意図を丁寧に細部まで読み取り、尊重して解釈、理解すべきとの意見に活発な発言が行き交い、それを誘う作品が次々にあるという、その気分が懇親会の雰囲気もつくった感じだった。

今回で運営委員を退任された後藤恵市氏の乾杯の発声。後藤氏のリクエストで始まり、定番となったフレンチ風串焼きなど、レストランシェフの、卓上に並ぶお料理の紹介から、にぎやかな歓談が始まった。

懇親会に先だって承認された歌人会新代表・桜井健司氏、副代表・高橋みずほ氏、田村元氏のスピーチ。

新運営委員の抱負、希望が反映された出席者それぞれの感想もあり、吉野裕之氏のいつもながらの軽快な司会に沿って、話題の尽きない一刻となった。

出席者は、伊藤美枝、鯨井可菜子、後藤恵市、三枝むつみ、桜井健司、高橋みずほ、高橋律子、田代弥生、田村元、塚田キヌエ、野一色容子、藤田絹子、松平盟子、吉野裕之の各氏十五名。

●初雪の十番館――河北笑子

暖冬と言われたこの冬、新春歌会が行われた一月十八日は珍らしく朝からの冷雨が粉雪（こふゆき）に変わり思いがけなく寒い日となった。総会に続き歌会に入る。今年は例年と異なり、第二評者を置かず、席順に二名ずつ評したのち全員を対象に意見を求め、総括を司会が要約するという方式で行われた。

まず一首目の「路地裏のシヨパン…」の歌《喫茶店》《閉店》そして結句の《午後》という体言止めでポツポツとした節調は如何か、という評に《いやいやこれは上質な社会詠》という評もあった。四首目の「日が暮れて…」の歌は《金色が黄葉（きようは）なのか、日差しなのか》また《二人分け入る》の二人の関係は？という疑問が出た。十四首目の歌「里家の床の間…」の歌の《声に読む学（が）がたし》は「少年老い易く学（が）がたし」の軸だろう。この「学（が）がたし」のフレーズは《傘

寿のわれ》にかかる。結句の「が」は「は」の方がいい、という声があったが「が」には「…であるのに」という意味も含むのでこのままでいい。二十二首目の「花毛布」は花柄の毛布ではなく、船室のベッドメーカーで、毛布を美しく飾り折りする事を言い、この場合、扇型に畳まれてそれを初日の出に見立てたもの。まだまだ触れたい歌が数あったが紙面の都合で割愛する。最後に、司会の方の総括は「司会」という大役に余計な負担をかけるので一考を要するのではと愚見を申し述べて歌会報告とさせていただきます。

●令和を迎えて――塚田キヌエ

令和二年横浜歌人会、総会・新春歌会が、馬車道十番館に於いて開催されました。横浜にはめずらしく粉雪の舞う一日でした。このため欠席が目立ち、一時より一号議案（五号議案とつづがなく進行、運営委員及び監事選任、退任委員の紹介（後藤恵市氏・工藤こずゑ氏）。新しい代表委員・桜井健司氏、副代表委員・高橋みずほ氏、田村元氏が選任されました。前代表委員の吉野裕之氏の挨拶等々式次第進み、新春歌会へ。和気藹藹と歌評が進み、短歌は一首について、喜び、比喩、哀しみ、痛み等々作者の心など入る。用言の詩型、韻律での短歌。出詠を丁寧に時間をかけての貴重な歌評会となり、新春にふさわしいひとときの

勉強となり、退任された吉野裕之氏の作品「満月がきれいいって振り向いた人が私の妻であること」。次に、新代表委員の桜井健司氏の作品「冬の来て「寒し」と「寂し」の差異こそはわずかなれども枯れ木の揺る」。運営委員を退任された後藤恵市氏の作品「氷雨降るひとひを家に籠もりみて机の上の翳となりぬる」。

懇親会の席では、選任された運営委員の挨拶、退任された後藤恵市氏の挨拶、料理長野口秀樹氏の挨拶、宴たけなわの中、松平盟子さんの出席をいただき、会にはぎやかとなり、有意義なひとときで会は閉じました。

一詠 草一——二十五首

- ・路地裏のシヨパンが聴けた喫茶店ひっそり閉店 小田之口久司
- ・春日の午後
- ・安らかに新しき年過したし 祈りつつ選ぶ正月飾り 中村規子
- ・日が暮れて又朝が来て日々すぐすあらたしき年希望の出でて 高橋律子
- ・金色に一山映えて静もれり二人分け入る櫛の林に 藤田絹子
- ・敬老とて夫に贈られし栗羊羹お相伴する今日のお三時 半澤敏子
- ・部屋いっぱい冬陽の差して明るきに唐三彩の馬の嘶き 伊藤美枝
- ・多分鳥の落しものにて庭に生えし幼木育ちて島土欄利古となる 河北笑子
- ・陽を舐めつつゆくがに飛び去る白頭鳥を目に追う日和の濡縁に立ち 堀部知子
- ・オブラートに包みし筈の言葉なりあらわになりて野を駆けめぐる 原 昌子

・かそかな旧道沿いに松飾り紙垂南天のとおく鈴の音 高橋みずほ

・氷雨降るひとひを家に籠もりみて机の上の翳となりぬる 後藤恵市

・白じろと俯きゆるる冬薔薇ふるさと哀し首里城かなし 津波古勝子

・満月がきれいといつて振り向いた人が私の妻であること 吉野裕之

・里家の床の間の軸声に読む学なりがたし傘寿のわれが 塚田キヌエ

・嘴太のからす電線をステージに「かあー」一声アルトを聞かす 朝井恭子

・旅に会ふボルドー美酒なり持ち帰る記念のコルクに薔薇の香三日 野一色容子

・福引の券を八回分ためてポケットティッシュをもらって帰る 荻谷君代

・わが街に冬は来ませりラーメンのどんこスープにネギを香らせ 田村 元

・もう少し遊んでいやう小春日を銀杏黄葉の散り敷く樹下に 田代弥生

・地震きたる二階のオフィスに三本の胡蝶蘭の茎いちばん揺れる 鯨井可菜子

・冬の来て「寒し」と「寂し」の差異こそはわずかなれども枯れ木の揺るる 桜井健司

・船室のベッドに置かる花毛布海より出づる初日の出かな 三枝むつみ

・いつみ、虎、朝焼け 目薬に名を付けてこの順に差すいま虎の時 鹿取未放

・体重の三分の一の食料を一日で食べる家鼠たち 真鍋正男

・海鼠めく心と思うもう一度、とも言えぬまま目を伏せるとき 大久保春乃

●楽しく研鑽しあえる場を 新代表委員 桜井健司

古典和歌の時代を含め、千年以上の長きにわたって詠まれ、愛されてきた短歌。「横浜歌人会」は、そんな短歌を愛する人達の団体です。会員相互の創作活動に寄与し、また懇親を深めるために、「横浜歌人会」は、活動を続けています。

横浜は、幕末期に海外諸国との玄関口として開港されて以来、今日に至るまで独自の文化を築き、発展してきました。新しい文化を積極的に受け容れる、先進的な土地柄と言えるでしょう。伝統と先進性、その両方を大切にし、横浜の名に相応しい、発信力のある、開かれた素敵な会にしていければと思います。

横浜歌人会には、二つの軸があると考えます。ひとつは、作品の質の向上を目指し、議論を深め研鑽していく文学団体としての役割です。もうひとつは、会員間の交流を通じて懇親を深める親睦会としての機能です。歴代の代表委員の方々は、前任の吉野裕之氏に至るまで、幅広い視点から様々な行事、イベントを考案、開催し、会を大いに盛り上げてくださいました。今後もその思いを継承、発展させていければと思います。

ご存じの通り、現在も予断を許さない社会状況が続いてはいますが、そうした中においても私達に今できる企画は何かを模索し、実現していきたいと考えています。状況が安定した段階で、研究会、観月会を始め、各イベントを再開いたします。会員の皆様と共に、短歌について直接語り合える日を楽しみにしています。

これからもお互いが楽しく研鑽しあえる場を、一緒に作り上げて参りましょう。

編集 後記

今回は、新体制となり初めての会報です。新春歌会は開けたものの、他の行事ができなくなる状況下で、会報だけは発行したいと運営委員で相談をしながら進めて参りました。緊急時の慌ただしさのなか、文章は運営委員で請け負いましたが、会員のみなさまと創り上げてゆくことをしたく、「歌で横浜の地図を描く、横浜の街並みを歩く」という広いテーマで募ったところ、八十名の作品が集まりました。会報の誌面にどう生かせるか、作品を白地図に落としたり、街並みをめぐる方法がよいのかと悩んだりしましたが、地図を独立させることを会報の版下を組ん

でいる吉野裕之さん（アトリエ云）より提案され、地図を付録とする形を取りました。

思いがけず地図という面を得て、横浜市の土地に短歌作品を俯瞰する、新たな短歌の見方を提示することができたのは大きな収穫です。ひとつの空間にある作品群は、小さなマスの集合体として作者を離れ、独自に動き出します。言葉が主体であることを、本来の言葉と読者の自由なかかわり方を地図上に実感することができます。そつと立ち上がる見えないことばが、韻文の言葉の深みを伝えてきます。

地図のデザインを、二〇一二年七

月に開催したシンポジウムにシンボジストで参加してくださった樋口賢太郎さんからご紹介いただき、大学の後輩であり、教え子にあたるグラフィックデザイナーの古田もえさんにお引き受けいただきました。短歌作品に形、色のデザインが加わることで、横浜の土地から短歌が蠢くような、短歌がつくる空間に横浜市の形が揺れながら現れてくるようです。そして古田さん曰く、地図でありながら上下の空間を生み出し、より複雑な空間を演出できないかと試みた雲の意匠は、さらに宇宙にある言葉であること、私たちの言葉が宇宙に広く開かれていることを気付か

せてくれました。デザインと言葉が地図の上に出会えた喜びとともに、深く感謝申し上げます。

返信される短歌をまとめてくれた鹿取未放さん、地図の制作費を捻出してくれた会計の田村元さん、運営委員の方々の心意気と代表委員の桜井健司さんの柔軟な決断によって、会報第一二一号と付録「うたの地図—Yokohama」が出来上がりました。

そして何よりも、会員のみなさまの短歌作品の力が原動力になりました。たことを心からお礼申し上げます。

これからも、横浜から短歌の言葉を発信し続けてゆけるように、努力して参りたいと思います。[M・T]

横浜歌人会会報第一二二号

発行日 二〇二〇年十二月二十四日

編集人 高橋みずほ

発行人 桜井 健司

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohana-kk.art.coocan.jp/>

制作 アトリエ云

印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。